



8月 赤れんが通信



赤れんが通信（中国語版）は北海道庁の于柳青枝（ウ リュウセイシ）国際交流員が執筆しています。北海道の情報や国際交流事業などについて書いたレポートです。

北海道へ赴任する前に、北海道の知床でクジラを見れるとたくさんの友達から聞きました。今年の8月、知床でクルーズ船に乗ってクジラを見て、知床半島を横断して、知床五湖で散策し、世界自然遺産・知床を通じ、人と自然との共生について新しい理解を得ました。

道東の秘境 知床半島

オホーツク海と接する知床半島は、特殊な地形と地理的な条件により、北半球で流水を觀賞できる最も南の地点となっています。冬になると、流水の下で大量のアイスアルジー（海水内や海水の底で増殖する藻類）が繁殖し、大量の養分を生み出します。この養分は海の中層に充満し、この流水が形成する栄養豊かな水が海の表層に運ばれることで、海の表層の植物プランクトンが増殖します。植物プランクトンは動物プランクトンの餌で、動物プランクトンは魚類や海棲哺乳類の餌になります。こうして陸上の生物にまでつながる食物連鎖が形成されていきます。



知床について

北海道の東北の端にある知床半島は、長さ70km、幅25kmの狭長な半島であり、西側がオホーツク海、東側が根室海峡に面しています。「知床」という地名の由来は、アイヌ語の sir-etoko、地山の突き出た所を意味しています。2005年7月14日、知床半島は南アフリカ共和国で行われた第29回ユネスコ世界遺産委員会で「自然遺産」と登録されました。



鯨が潜る瞬間



知床五湖



知床五湖のガイドツアー

知床五湖ガイドツアーの前日、羅臼に泊まりました。雨が止まらず、明日の散策ができるかどうか、心配でした。翌日朝、車で知床横断道路を走って、羅臼岳を越えた瞬間、天気は一気に晴れてきました。遠く見えるオホーツク海もキラキラしていて、空と海の境界線がわからなくなりました。

知床五湖フィールドハウスに到着して、熊と遭遇する時の対応法についてのレクチャーを受けて、ガイドに導かれ出発しました。みんなは「熊とは遭遇したくないね」と言いながら、心の中では少し熊と出会うことを期待しています。

途中、ガイドは熊の跡が私たちに示しました。

木を登った時幹に残った爪痕
蜂巣を探すため土に掘った穴
喧嘩した時折れた木
……

何もかも私たちに「ここはあなたの家ではない、ここは熊たちの家です」と示しています。



たまご形のキノコ

緊張しながら楽しい三時間を過ごしました。蛇やキノコ、いろいろな自然と風景を楽しみましたが、熊は見かけなかったです。フィールドハウスに戻り、みなさんの心の中は何か物足りなかったようでした。

「私たちは一体熊と会いたいのだろうか？ 会いたくないのだろうか？」
トイレでこの問題を考えていた時、壁に貼ってある文章に気づきました。
「餌やりが熊を殺す ソーセージの悲しい最後」
「え！まさか熊が毒ソーセージでも食べてしまった？」

餌やりされた野生動物たち

文章をきちんと読んでみました。ソーセージというメスの小熊の悲しいストーリーです。ソーセージは知床の原始林の中で生まれました。ほかの小熊と同様に、お母さんの保護で楽しく成長していました。1998年、お母さんから離れたソーセージは知床国立公園の入り口近くに姿を現しました。そして、観光客が彼女に一本のソーセージを投げ与えたことが、すべての始まりです。



知床の熊の爪痕と可愛い苔



それから、ソーセージはいつも人間の美味しい食べ物を望むようになりました。その美味しさをもう一度味わいたかったソーセージは頻りに人の目の前に現し、何度も追い払われても結局戻ってきました。最後に、彼女は小学校の近くに現しました。事件を防ぐため、スタッフはライフルを取り出すしかなかったです。発砲の一瞬、ソーセージは「あっ」というような驚いた表情を見せました。

悲しいストーリーです。

たった一本のソーセージで、賢い野生動物たちは人間の世界の美味しさを味わいました。都会に住んでいる人たちは野生動物を見て、思わず餌やりをすることがよくあります。何気ない気持ちの餌やりは野生動物たちを深淵しんえんにおとしました。ソーセージのような賢い熊は、一旦人間の食べ物の味を味わうと、人間の世界の美味しさに狂い始めました。「もう一度食べたい」。動物たちは警戒なく頻りに人類の住宅街に侵入し、結局、人と動物、お互いに取り返しのつかない悲劇をもたらしました。五湖に入る前に、スタッフさんに何度も注意されました「餌やりしない、食べ残しは捨てない」。

中国にも似たような話もあります。これはそんなに悲しいストーリーではありません。中国のココシリでは、「カスタードケーキ」という一匹の人気の狼がいます。カスタードさんは年を取るため群れに外され、うっかりして国道に入りこみました。ガリガリのカスタードさんは国道でうろうろしていた時、偶々通りかかった観光客に目撃され、カスタードケーキ一つを与えられました。カスタードケーキの美味しさを知る彼は、毎日国道で観光客のケーキを待っていました。そし



オオカミのカスタードケーキさん

て、カスタードさんは人間に向かって尻尾を振ったり、腹を出して地面を転がったりするなど、飼い犬のような振り舞いまでもするようになりました。一年の後、彼はビール腹の狼になりました。ココシリの管理人たちは彼のことに気づき、狼としてよくないと判断し、彼を捕まえて麻酔薬を注射して、一晩かけて彼を国道から百キロ離れた草原の奥へ送りました。でも、カスタードケーキへの情熱のおかげで、彼は百キロ走って再び国道に戻りみんなの餌をねだります。



大自然の中には、いろいろな要素があります。

食べ物を求めている野生動物。

好奇心満々の観光客。

野生動物の存在を気にしながら暮らす地元の人々。

野生動物と人との共存を目指したときに、私たちはいったい何ができるのでしょうか。





驚くほどの北海道の七夕

八月になって、「天階夜色涼如水、臥看牽牛織女星」(天上の夜空は水のように涼しくみえ、寝ながら牽牛星と織女星を見る)の季節になりました。8月6日、茶道の稽古を終えて、先生は「今日のお菓子は天川です。明日は七夕ですから」と私に言いました。

「え！？明日は8月7日です。明治改暦後、日本の七夕は7月7日ではないでしょうか？」という質問を抱えていろいろ調べました結果、北海道の七夕は本州と比べると驚くほどの違いがあります。

北海道では、函館と根室以外、七夕は基本8月7日です。

日本の七夕

日本の七夕は中国の影響を受け、昔からはずっと旧暦の7月7日でした。日本のお盆は旧暦の7月15日なので、七夕の期日に近いため、2つの祝日を一齐に祝うことがよくありました。しかし、明治改暦後、七夕は西暦の7月7日になり、お盆はそのまま旧暦の7月15日で、2つの祝日の間に1か月間が開いていたため、関連性がどんどん薄れました。明治改暦の2年後、五節句の七夕と人日、上巳、端午、重陽を廃止しましたが、百年続いた風習がこのまま終わることはありませんでした。西暦の7月7日、みんなも短冊にお願い書いて飾ったりして、イベントなどが行われます。

ローソクもらい

北海道の七夕の日、子供たちは「ローソクもらい」を行います。子供たちは浴衣を着て提灯を手にして、歌いながら近所の家を回り、ローソクやお菓子をもらいに行きます。「ローソク出せ、出せよ。出さないとかつちやくぞ。おまけに噛みつくぞ。」なかなか物騒な歌詞ですが、歌う子供は就学前から低学年ぐらいの子供なので、かえって可愛らしく聞こえています。北海道の七夕はハロウインの「お菓子くれなきゃいたずらすぞ」にも似ていますね。



七夕の短冊を柳の木につる

皆さんご存じの通り、七夕の時、願いを書いた短冊を笹に飾る風習があります。北海道に来てから、北海道の七夕の日付は違うだけではなく、短冊の釣り方本州と違います。北海道の七夕は柳などに短冊を吊るすのが一般的です。その原因は、北海道では細長い笹や竹が生える気候ではないのです。その代わりに、短冊を柳の木につるします。これが北海道の事情に合わせ、文化を変えるという北海道文化の特徴ではないでしょうか。

